

## 『宇治拾遺物語』と話主

片岡了

### 一

「宇治拾遺物語」所収の各説話（「段」とか「章」とか称すべきであろうが、かりに説話としておく）の冒頭と末尾の形式は、たとえば「今昔物語集」のそれなどに比べると、かなり多様である。

「今昔物語集」においては、しばしば論ぜられるように各説話は、原則として、「今ハ昔」で始まり、「トナム語り伝ヘタルトヤ」で終るように統一せられている。<sup>①</sup>そのようなあり方に対し、「宇治拾遺物語」においては、冒頭は、「今は昔」、「これもいまはむかし」、「昔」、或は「此ちかくの事なるべし」（四の一）のように発端の辞をおいているものと、「大和国に、龍門といふ所に聖ありけり。」（一の七）、

「土佐国はたの郡にすむ下種ありけり。」（四の四）、「東北院の菩提講はじめける聖は、もとはいみじき惡人にて、人屋に七度ぞ入たりける。」（四の六）などのように、いきなり話の中身に入っているものがある。そして、末尾の終り方も、「……とぞ」（一の二）、「……とか」（四の九）、「……とかや」（七の七）、「……となん」（五の一）、「……とぞいひける」（五の五）、「……と」（三の一四）或は、「往生伝に入たりとか」（五の四）、「日本法花験記にみえたとなん」（六の一）、「不思議の事なれば、するの世の物語にかくしるせる也」（二の二）のようなものがある一方、そのような伝聞を示す形式を全く欠き、「郡司がことばにたがはず。」（一の四）、「治部卿うちうなづきて、『さりけり、さりけり、物ないひそ』とぞいはれる。」（一の一〇）、「僧達わらふ

事がぎりなし。」(一の二二)のように、事件の結末がそのままその段の末尾になっているもの、また、「さくくりあげて、を」となきけるは、うたてしやな。」(一の二三)のように、末尾に短い感想・批評の語の記されているもの、さらには、「されば、はかなくさはよみたてまつるとも、きよくてよみたてまつるべき事なり。『念仏、読経、四威儀をやぶる事なかれ』と、恵心の御房もいましめ給にこそ。」(一の二)のようにやや長文の批評・注記のあるものなど、多様である。その結果、「宇治拾遺物語」では、作品の筆者(通常の文学作品では「作者」と称せられるが、そのあり方が問題になるので、ここではひとまず筆者と呼んでおく)と、各説話の「語り手」(「話主」)の位置・設定が一樣ではないことになる。小稿では、「宇治拾遺物語」の各説話の文章のすすめ方を分析して、そのあり方について考えてみる。此の問題は、説話文学の作品全体をとりあげて比較検討してはじめて有効であるが、いまはさしあたって「宇治拾遺物語」についてみておくことにする。

## 二

一般に説話の末尾に現われる「トナム」、「トゾ」、「トヤ」などの形式について考えると、たとえば、「トナム」

を例にとつていえば、

「昔、『……』トナム。」

とある場合、その『……』の部分は、いわゆる「作中場面」で、それをつつみ込む形で「(昔)……トナム」<sup>④</sup>があるわけであるが、これを誰が語るかという面から見ると、一般的には、そこに二つの存在があることになるであろう。一つはその『……』(ないし『昔)……』の事件に立ち合ったことになるはずの人物、かりにこれを目撃者Aとする、今一つは「(昔)……トナム」<sup>⑤</sup>(「と云うことです」と作品の現在において語る人物Bである。Bがいわゆる説話の「語り手」である。作品としての「説話集」においては、この両者は区別されなければならない。その理由は、まず第一に、文脈上(しかもわれわれは文脈によって考えるしか方法がない)、「トナム」は、就中その「ト」は、他の話柄を引用する時の記号であり、その時その言語主体は、事実はどうであれ、その話柄を他から聞いたものとしてのべることになるからであり、また作品の成立過程、作者(一般に)が「語り手」を設定するその過程からいってももし両者を同一と見れば、Bは一つの説話集の作品に収められる各個別に無関係に独立した数十数百の「事件(話)」、いわば本来個々に独立した異なった「物語」の世界に、同時に入りこむ

ことになってしまふからである。その点の一つの主題によつて統一せられた、一元的な世界をなす作り物語の場合の「語り手」とはことなる取扱ひが必要であると考えられる。例えば、「源氏物語」の「語り手」は小西甚一博士のいわれるように、源氏の誕生前から、死後の世代、また京都のことから長谷、九州のこと迄あらゆることを知っている存在ということになるが、しかしそれは、一つの主題によつて一元的に統一せられた、いわば同一性の世界の中においてあることになる。また、「語り手」「筆録者」「作者」の関係でよく言及される「大鏡」などでも、翁達が一見異質な個別に独立した各種の事件に立ち合うように見えるが、実は皇室なり、藤氏一族なりという一定のわく(あるいは歴史語りの世界というわく<sup>⑦</sup>もあるから、やはり一元的に統一せられた世界ということになる。その点、「説話集」における各説話相互の間の関係とはことなることになる。

さて、このように「目睹者」A、「語り手」Bがひとまづ考えられるが、その他にその間に「伝え手」<sup>⑧</sup>ともいふべき存在がおかれる場合がある。(それは後に具体例によってふれる)それら各々のおかれる立ち場、性格、相互の関係が、「宇治拾遺物語」においては説話相互の間で一様で

ないのである。

「今昔物語集」においては、周知の如く、各説話の首尾は、例外的な少数を除いて、「今ハ昔……トナム語り伝ヘタルトヤ」で統一せられている。これが「今昔物語集」の基本的な形式と認められる。この形式においては、全巻を通じて、少なくともその「語り手」は同一の存在をもつて統一せられていることになる。右に記した目睹者や、伝え手などは当然個々に異なることになるが、「今昔物語集」という作品において「……トヤ」と述べる「語り手」は、全巻を通じて不変の存在である。各説話はそれぞれに独立しているのであるから、「今昔物語集」の各説話をもとにもどしてばらして、千数百の「話」として個別に独立させれば、千数百のありようがあることになるが、それはここで言えば先の目睹者とか伝え手に当る存在のありようである。作品としての「今昔物語集」というのは、全体が一つのまとまりであつて、それで一つの世界を形づくるのであるから、「今昔物語集」という作品の全巻を通じての「語り手」というものは独自に設定せられる。そしてそれは、「今昔物語集」の説話の文脈では、「語り伝ヘタル」ことを享受者に「語る」位置に立つ。「伝え手」は別にあることになる。「今昔物語集」では、文脈上は、原則として、

「(作中場面)」(目睹者が語る)、「今ハ昔……トナム語り  
伝ヘタル」(伝え手が語る)、「トヤ(云ふ)」(語り手が語  
る)という構成となり、説話によっては、目睹者が伝え手  
である場合があるが、しかし、少なくとも、「伝え手」と  
「語り手」とは、ことなることになる。そしてその「語り  
手」は全巻を通じて同一の属性をもった存在で統一せられ  
ている。

ところが、「宇治拾遺物語」においては、その性格・立  
ち場が、説話によって数種類にことなることになると考え  
られる。

### 三

例えば、「宇治拾遺物語」巻五の一三は次のような構成  
である。

是も今はむかし、山の横川に賀能知院といふ僧、きは  
めて破戒無慙のものにて、昼夜に仏の物をとりつかふ  
事をのみしけり。横川の執行にてありけり。政所へ行  
とて、塔のもとをつねに過ありきければ、塔のもとに、  
ふるき地蔵の物の中に捨おきたるを、きとみたてまつ  
りて、時々きぬかぶりしたるをうちぬぎ、頭をかたぶ  
けて、すこし／＼うやまひをがみつゝゆく時もありけ

り。かかるほどに、かの賀能はかなく失ぬ。……(師  
の僧の夢にその地蔵菩薩が賀能を無間地獄から救い出  
しに行つて返つたと知る)……さてなくなく此地蔵を  
いだし出したてまつり給てけり。いまにおはします。  
二尺五寸計の程にこそと人はかたりし。これかたりけ  
る人は、をがみたてまつりけるとぞ。

この話では、「とぞ」より前の部分で、二個の存在を第一  
次的には考えることになる。即ち、「……五寸計の程にこ  
そ」迄を「かたりし人」(厳密にはその人はさらに「我は  
をがみたてまつりき」と言ったことになる)と、「これか  
たりける人はをがみたてまつりける」までを語る人物(こ  
れは伝え手である)とである。しかし、それが、「宇治  
拾遺物語」の作品時点での「語り手」、即ち「とぞ」「とぞ  
(つたへたる)」の省略と見る)とのべる人物(これが、「宇  
治拾遺物語」としての「語り手」である)に対しては、そ  
の「……をがみたてまつりける」までを語る人物(伝え手)  
が、それ以前を自分の聞きつたえたこととしてのべること  
になる。図式化すれば、「かたりし人」が、「……をがみ  
たてまつりける」迄を、「伝え手」に語り、それを「伝え  
手」が「語り手」に伝え、それを「語り手」が語つたのを  
「筆者」が筆録したという形になる。

また卷三の一三は次の如くである。

これも今はむかし、因幡国たかくさの郡、さかの里に伽藍あり。こくりう寺となづく。此国の前の国司かなが造れるなり。そこに年老たるものかたりつたへていはく、此寺に別当ありき。家に仏師をよびて、地蔵をつくらする程に、別当が妻、こと男にかたらはれて、跡をくらうして失ぬ。別当心をまどはして、仏の事をも仏師をもしらで、里村に手をわかつて尋もとむるあひだ、七八日をへぬ。……(寺の専当法師が別当に代つて仏師達に食物を供し、地蔵の木作だけをして死ぬが、その徳によってこの法師は生き返る)……其のち此地蔵菩薩を、妻子ども彩色し供養したてまつりて、ながく帰依したてまつりける。いまこの寺におはします。

この説話において、「此寺に別当ありき……」から後は、「そこに年老いたるもの」「かたりつたへていはく」内容であり、その部分と、「これも今はむかし因幡国たかくさの郡……そこに年老たるものかたりつたへていはく」の部分とは明らかに主体がことなる。「年老たるもの」が先の目睹者A(それがこの説話では「伝え手」にもなっている。)に当り、「これも今はむかし……かたりつたへていはく」

をいうのは「語り手」である。勿論「宇治拾遺物語」においてはこの「語り手」が、「年老たるもの」(目睹者、同時に伝え手)の伝えた内容を引いてこの説話全体を語るのがあるが、この説話で注意されるのは、その場合、この「語り手」は、自分に語り伝えた「そこに年老たるもの」の語り口を原則としてそのまま伝えていられると思われる点である。「此寺に別当ありき」という口調がそれである。この「き」は、例えば「今昔物語集」巻一九の三六語その他に認められる、説話冒頭の「キ」と同位相のものと解し得る。<sup>⑩</sup>

さてその結果、この説話では前掲の例とちがって、「伝え手」に当るものが別個のものとして設定されず、目睹者↓語り手↓筆者という過程をふむことになる。ただ、前述のごとく、この説話では、目睹者が「伝え手」にもなっていることになるが見なし得るが、ともあれ、結果的に文脈上は、「語り手」が目睹者から直に話をきいて、それを語っている形になる。

このようなあり方がさらに次のようになることがある。昔、はかまだれとていみじき盗人の大將軍ありけり。十月計に、きぬの用ありければ、衣すこしうけんとして、さるべき所々うかぐひありきけるに、夜中ばかりに、人みなしづまりはててのち、月の朧なるに、きぬ

あまたきたりけるぬしの、指貫のそばはさみて、きぬの狩衣めきたるきて、たゞひとり笛吹て、ゆきもやらす、ねりゆけば、「あはれ、これこそ、我にきぬえさせんとて出たる人なめれ」と思て、走かゝりて衣をはがんと思ふに、あやしく物のおそろしく覚えければ、そひて二三町ばかりいけども、我に人こそ付たれと思たるけしきもなし。いよ／＼笛を吹ていけば、心みんと思て、足をたくして走よりたるに、笛を吹ながら見かへりたる氣しき、取りかゝるべくもおぼえざりければ走のきぬ。かやうにあまたたび、とざまかうざまにするに、露ばかりもさわぎたるけしきなし。「希有の人かな」と思て、十余町ばかりぐして行。「さりとてあらんやは」と思て、刀をぬきて走かゝりたる時に、そのたび笛を吹やみて、立帰て、「こは、なにものぞ」ととふに、心もうせて、我にもあらで、ついゐられぬ。又「いかなる者ぞ」ととへば、今は、にぐとも、よもにがさじと覺ければ、「ひはぎにさぶらふ」といへば、「何ものぞ」ととへば「あざな袴だれとなんいはれさぶらふ」と答ふれば、「さいふ者ありときくぞ、あやふげに、希有のやつかな」といひて、「ともにまうでこ」とばかりいひかけて、又おなじやうに笛吹てゆく。

この人のけしき、今はにぐともよもにがさじと覺ければ、鬼(ゴ)に神とられたるやうにて、ともに行程に、家に行つきぬ。いづこそと思へば、摂津前司保昌といふ人なりけり。家のうちによび入て、綿あつき衣一を給はりて、「きぬの用あらん時は、まゐりて申せ。心もしらざらん人にとりかゝりて、汝あやまちすな」とありしこそ、あさましくむくつけくおそろしかりしか。いみじかりし人のありさま也と、とらへられてのち、かたりける。(巻二の一〇)

この説話では、冒頭の「昔、はかまだれとていみじき盗人の大將軍ありけり。」の部分と、末尾の「……と、とらへられてのち、かたりける」の部分と、「語り手」の責任においてなされた表現で、それにはさまれる「十月計にきぬの用ありければ、衣すこしまうけんとして、……とありしこそ、あさましくむくつけくおそろしかりしか。いみじかりし人のありさま也」の部分は、全体が袴垂を主体とした表現であり、他でもない袴垂自身が語った口調と見なされる。この部分には文の中間に「けり」が六回、文末に一回あるが、他の文末は八個所が原形又は「ぬ」「なり」止めであり、一個所が「き」である。文末の一回の「けり」は、「いづこそと思へば、摂津前司保昌といふ人なりけり」の

所で、これは、いわゆる「驚きの表現」である。このような文の進め方は、例えば巻一の「道命の話で、全体が会話をはさんで六文あり、そのうち二文は末尾の批評の部分で、そこは「事なり」「給にこそ」と結ばれるが、それ以外のいわゆる作中場面の四文は全て「けり」止めであり、またその他に文中間に「けり」が八回現われているような表現と、対照的である。

また、特にその末尾の「『保昌が袴垂に』……汝あやまちすな」とありしこそ、あさましくむくつけくおそろしかりしか。いみじかりし人のありさま也」という表現は、袴垂の口から直に話された形のものである。<sup>12)</sup>

そして何より、説話末尾の「と、とらへられてのちかたりける」の「と」によって括られるのは、どこからと見るべきか。結局、冒頭の人物紹介（これは袴垂がいうはずがない）を除いた「十月計にきぬの用ありければ……」まで行きつく他ないであろう。

さて、こう見てくると、この説話は、「語り手」がはじめに、時代と人物を紹介し、最後を「と袴垂がとらえられてのちに語ったのでした」といってしめくくる。その中間は、袴垂が直に、第一人称視点で語っているものをそのままうつしたと見ることができる。

結局この説話の文の進め方は、袴垂が自分の体験を第一人称視点で話したことを、「宇治拾遺物語」の「語り手」が聞いて来てほぼそのまま再現して「語る」のを筆者が筆録した形ということになる。事件の体験者↓「語り手」↓筆者という構造である。

このことは、これと同話を取る「今昔物語集」巻二十五の七の本文の進め方と対比すればさらに明確である。主に異なる点だけを左に摘記する。

今ハ昔、世ニ袴垂ト云極キ盗人ノ大將軍有ケリ。心太ク力強ク、……並ビ無キ者ニナム有ケル。万人ノ物ヲバ隙ヲ伺テ奪ヒ取ルヲ以テ役トセリ。其レガ十月許ニ衣ノ要有ケレバ……所々ヲ伺ヒ行ケルニ、……大路ニスバロニ衣ノ数着タリケル主ノ……練リ行ク人有ケリ。袴垂、是ヲ見テ、「哀レ此コソ我レニ衣得サセニ出来ル人ナメリ」ト思ケレバ、喜テ走り懸テ、打臥セテ衣ヲ剝ムト思フニ、恠シク、此ノ人ノ物恐シク思ケレバ、副テ二三町計ヲ行クニ、此ノ人……弥ヨ静ニ笛ヲ吹テ行ケバ、袴垂「試ム」ト思テ、足音ヲ高クシテ走り寄タルニ、……走り去ヌ。此様ニ数度、此様彼様ニ為ルニ、塵計騒タル気色モ無ケレバ、……十余町許具シテ行ヌ。「然リトテ有ラムヤハ」ト思テ、袴垂、刀ヲ拔

テ走り懸タル時ニ、其ノ度笛ヲ吹止テ立返テ、「此ハ何者ゾ」ト問フニ、……我ニモ非デ被突居ヌ。……此ノ人「……共ニ詣来」ト許云ヒ懸テ、亦同様ニ笛ヲ吹テ行ク。……此ノ人大キナル家ノ有ル門ニ入ヌ。……入テ即チ返リ出テ、袴垂ヲ召テ、綿厚キ衣一ツヲ給ヒテ、「今ヨリモ此様ノ要有ラム時ハ、参テ申セ。……汝不被誤ナ」トゾ云テ、内ニ入ニケリ。其後、此ノ家ヲ思ヘバ、号撰津前司保昌ト云人ノ家也ケリ。「此人モ然也ケリ」ト思フニ、死ヌル心地シテ、生タルニモ非デナム出ニケル。其後、袴垂被捕テ語ケルニ、「奇異クムクツケク怖シカリシ人ノ有様カナ」ト云ケル也。此ノ保昌朝臣ハ家ヲ繼タル兵ニモ非ズ、……世ニ靡テ此ノ人ヲ恐デ迷フ事無限リ。但シ子孫ノ無キゾ、家ニ非ヌ故ニヤト、人云ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。

(古典大系本四、三三—三六)

この本文で、傍線を附した部分は、「宇治拾遺物語」の方にはないか、又はそれとことなる部分である。「今昔物語集」所収の本文の方では、「其レガ十月許ニ」「袴垂、是ヲ見テ」「袴垂試ムト思テ」「袴垂刀ヲ拔テ」「袴垂ヲ召テ」など、明らかに、第三者がその様子を描写する形の表現、即ち、第三人称視点で文が進められている。袴垂が自

らの体験を話す口調ではあり得ない。また、「宇治拾遺物語」の方では、前述の如く、「十月計……あさましくむくつけくおそろしかりしか。いみじかりし人のありさま也」全体が「と、とらへられてのち、かたりける」の内容になるという構文として解さねばならないが、「今昔物語集」の方では、「其後、袴垂被捕テ語ケルニ……ト云ケル也」の中身として「奇異クムクツケク怖シカリシ人ノ有様カナ」の部分があることになっている。そしてそれら全体が末尾の「トナム語り伝ヘタルトヤ」で括られることになるから、目睹者が第三人称視点で語りそれを伝え手が「今昔物語集」の「語り手」に伝え、それを「語り手」が語ったのを筆者が筆記した形になる。

このように対比してみると、先の「宇治拾遺物語」所収の本文の「昔はかまだれとていみじき盗人の大將軍ありけり。……と、とらへられてのちかたりける。」ではさまれた部分の文の進め方は、袴垂の体験談をそのままうつした形のものになっていると言つてさしつかえないであろう。さて、右に掲げたような例に対し、巻八の二は次のようである。

是も今はむかし、下野武正といふ舎人は法性寺殿に候けり。あるをり、大風大雨ふりて、京中の家みなこぼ



れやぶれけるに、殿下、近衛殿におはしましけるに、南面のかたに、のゝしるものこゑしけり。誰ならんとおぼしめしてみせ給に、武正、あかかうのかみしにも蓑笠を著て、みののうへに繩を帯にして、ひがさのうへを、又おとがひになはにてからげつけて、かせ杖をつきて走まはりておこなふなりけり。大かたそのすがた、おびただしく、にるべき物なし。殿、南おもてへいでて御簾より御らんずるに、あさましくおぼしめして、御馬をなんたびける。

この例では「語り手」の位置が、これまでに見て来た例とはことなる。ここでは、「語り手」が、作中場面に立ち合つたものとして、第三人称視点<sup>⑭</sup>で文が進められている。しかも簡潔にはあるが、「誰らなんとおぼしめして」とか「あさましくおぼしめして」のように、登場人物の心理に立ち入って語っている。いわゆる全知視点にあるものとして設定せられている。先に見たような、目睹者↓伝え手↓「語り手」という過程は、ここでは、文脈上からはたどることができない。「語り手」自身がその場に居合わせて一部始終を見ていたことになる。のみならず、登場人物の心の動きまでも知っていることになる。このあり方は、いわゆる「作り物語」における「語り手」の位置に等しい<sup>⑮</sup>。そ

して、それに伴って、これまで「筆者」と称して来た存在も、このような例においては、これまた「作り物語」の「作者」に匹敵する位置に立つと言ふことになる。そのような作者によって設定せられた全知視点の「語り手」が、この話を「語」っていることになる。そしてその「語り場面」は他でもない「宇治拾遺物語」という作品の現在がそれに当るであろう。

#### 四

前節にかかげたものは、いずれも、いわゆる「説話」だけで成立している例であるが、「説話」の他に、感想・批評・注記などを持つものの構造はどう解されるであろうか。卷三の八を例にとってみる。

今はむかし、木こりの、山守によきをとられて、佗し心うしと思て、つら杖つきてをりける。山もりみて、  
「さるべきこと申せ、とらせん」といひければ、

あしきだになきはわりなき世中に

よきをとられてわれいかにせむ

とよみたりければ、山もり返しせんと思て「うゝゝ」とうめきけれど、えせざりけり。さて、よきかへしとらせてければ、うれしと思けりとぞ。人はただ歌をか

まへてよむべしとみえたり。

この例で、「人はただ歌をかまへてよむべしとみえたり」といふ感想・注記の語が「とぞ」の後にある点に注意したい。<sup>⑩</sup>

周知の通り、「宇治拾遺物語」に近接する時代及びそれ以後の、いわゆる仏教説話集——発心集、撰集抄、沙石集といった作品では、説話の後に展開せられる、感想・批評・論説というべき部分がきわめて長くなる。たとえば「沙石集」のときでは、「説話」はほんの数行で、無住が仏教教理をふまえて展開する論説・説教の部分がその何倍もあるという例がある。そこではすでに「物語」という姿勢はなくなつて、無住という個性が直接に読者の前に出て自身の個性にねざして説教するのである。「物語」における「語り手」の位置に立つものは影をひそめて、作者が自ら話すことになる。そこに、説話集から仏教説話集といわれるものへの質的転換があると思われるが、そのようなあり方とのかかわりにおいて、右の感想部分に注意したいと思う。すでに何回もふれたが、「今昔物語集」では、「説話」・感想・注記全体が、「今ハ昔……トナム語り伝ヘタルトヤ」というわく組みで括られている。したがって全体が、「語り手」の所為として位置づけられる。筆者はそこで

筆録者の位置に身をおくことになる。ところが、中世の仏教説話集では、筆者（作者）が個性化せられ、強く前面に立ち現われることになる。但し、「筆録者」の位置に身をおくというのは、作品化における、「説話」に対する「筆者」の身のおきようを問題にしているものであって、そういう位置に身をおいて書いているということが、他でもない一つの「スタイル」なのである。そういう意味ではまごうかたなくそれは作者である。

右にかかげた卷三の八は、「今はむかし……とぞ」ではさまれた「木こりの……うれしと思けり」の部分は、いわゆる「作中場面」で、そこは第三人称視点で語られている。つまり、目睹者が全知視点に立つて語り聞かせたのを聞いて「語り手」はそれを「今はむかし……とぞ」といってここに「語る」。それが一旦終つて、その後へ「語り手」が感想をのべていることになる。この「語り手」は筆者（この場合作者というべきか）によって設定せられたものであるから、この感想は筆者が「語り手」に言わせていることになる。つまり「説話」は「今はむかし」という説話的現在の出来事として語られ、その後に、それを「宇治拾遺物語」の作品現在の語り場面で、それについての感想をのべるということになる。「今昔物語集」の場合のように全体が「今

昔……トナム語り伝ヘタル」で括られると感想も「伝え手」の所為ということになり、したがって説話に感想・注記を合わせた形のものが伝承され、それを「語り手」が聞いて語ったものを筆者が筆録したことになる。そこに筆者（作者）の身のおきよう（作品制作の態度）のちがいがあつた。いま「宇治拾遺物語」のこの段の文脈においては筆者が筆録者としてでなく作者としての位置に立つことになると解される点、そのあり方は仏教説話集におけるそれに近いと見るのではなからうか。

同じように感想・注記部分をもちながらも巻一の二のよう、

これもいまはむかし、「説話」内容、さればいかにも  
 〱平茸はくはざらんに事かくまじき物なりとぞ、

のようになると、「今昔物語集」のような構造であつて、伝え手でもある目睹者が説話と感想をのべ、それを「語り手」が「これもいまはむかし……とぞ」といつて語ったものを筆者が筆録したことになる。

ところが、巻一の一のように、

今はむかし、道命阿闍梨とて……「説話」内容……さ  
 ればはかなくさはよみたてまつるときもきよくてよみた  
 てまつるべき事なり。「念仏・読経、四威儀をやぶる

事なかれ」と恵心の御房もいましめ給にこそ。

となると、先の巻三の八ともちがつて、前節にふれた巻八の二に見たような全知視点の「語り手」が、作中場面が終つた後、一転して、語り場面に移動して感想をのべることになる。これも先の巻三の八とは「語り手」の位置はことなるが、仏教説話の形に近い。ただし、観点をかえて物語の歴史の上からいえば、これは作り物語における「草子地」<sup>⑧</sup>のあり方につながることにすると見られるが、しかし「説話」全体についての感想である点で、片方に仏教説話の形式をおいて見るなら、やはりこれは一歩すすめば仏教説話における論説・説教の部分のようなものに展開していくと考えられる。

## 五

さて、叙上のように、「宇治拾遺物語」においては、「語り手」と「筆者（作者）」とが、

- ④ 作中場面目睹者 → 伝え手<sup>⑨</sup> （第三人称視点・全知視点） → 「語り手」  
     ↓ 筆者（筆録者） （巻五の一三など）
- ⑤ 作中場面目睹者 → 伝え手、<sup>⑩</sup> （第三人称視点・全知視点） → 「語り手」  
     ↓ 筆者（筆録者） （巻三の一三など）
- ⑥ 作中場面体験者（＝伝え手、<sup>⑪</sup> （第一人称視点・直談）） → 「語り手」

—↓筆者（筆録者）「巻二の一〇など」

③「語り手」（全知視点・目撃者）——↓筆者（作者）「巻八の二など」

二など」

④作中場面目撃者（＝伝え手、第三人称視点）——↓語り手（「説話」）

（感想）——↓筆者（筆録者・作者）「巻三の八など」

⑤作中場面目撃者（＝伝え手、感想）——↓語り手——↓

筆者（筆録者）「巻一の二など」

⑥「語り手」（全知視点・目撃者・第三人称視点・「説話」・感想）——↓筆者（作者）「巻一の二など」

などといった多様な位置・関係に立つことになる。（これで全てをつくしているわけではない。多様であるということを示したにすぎない。）「宇治拾遺物語」の「筆者」は、ある場合は「筆録者」としての位置に立ち、ある時には「作者」と称すべき位置に立つ。またその「語り手」は、ある時は「伝え手」からその話を伝え聞いて、それを再話する形で「語り」、ある時にはその話の体験者の直談を聞いて、それを語り、さらにある場合には、自分自身が全知視点を得てその事件に立ち合ったものとしての位置に立つて語り、というように、文学作品の「話主」としては、一貫性を欠いた、雑多な性格のものとしてあることになる。「宇治拾遺物語」全体は一つのまとまり、統一体として

あるのであるから、それ全体を通じての「語り手」というものは同一の存在で一貫せられていることになるはずであるが、それが結果的に一元的でない、異質ないくつかの存在に分裂するようなことになってしまうのである。<sup>⑧</sup>

そこに「宇治拾遺物語」の雑纂性があると考えられる。

（昭和五五年三月末日）

## 註

① この他、靈異記や三宝絵の末尾の形式がかなり統一的であることを岡村和江氏が指摘しておられる（「説話物語の文体」・日本の説話（7）所収、七七頁）。

② 小西甚一博士は「分析批評のあらまし」（「解釈と鑑賞」昭和四二年五月号一六頁）の中で「ある作品のなかで享受者に事がらをつたえる役が、すなわち「話主」である。その作品が叙事型であるとき、話主を「語り手」と呼ぶこともある」と説明しておられる。

なお、「宇治拾遺物語」巻二の二は、「今は昔、延喜の御時、早魃したりけり。……僧都になし給へり。不思議の事なれば、すゑの世の物語にかくしるせる也。」とある。これでは「かくしるせる也」とあるために、「筆者」が「語る」かに解される。しかし、ここでもやはり、「語り手」と「筆者」とは区別せられねばならない。現実の存在である「筆者」は「延喜の御時」の人物ではないからである。ただ、「語り手」の語りが終わった後へ「筆者」が直に顔を出した形というこ

とはできようか。ないしは、「語り手」の他に、「筆記者」(「宇治拾遺物語」の「筆者」とはちがう)を認めるべきか。「大鏡」の形式が参考になる。

③ 小西博士同右書二五頁参照

④ 「トナム」、「トゾ」などは、それで文を終結させる力は元来もたないから、「トナム語り伝へタル。」とか「トナム伝へタル。」(「宇治拾遺物語」でいえば巻一三の一三に「とぞかたり伝たる」、巻一三の一二に「とぞ申伝たる」の例がある)の如きの省略と解されるであらう。

また、「昔」は、「昔、『……』トナム」のように考えるか、「昔……」トナム」のように考えるか議論の余地があるかと思うが、ここでは春日和男氏(「今昔」考、第二節)の御説のように「昔……トナム」を呼応させて見ておく、

⑤ 岡村和江氏は(①書九一頁)「伝聞形式」を分類せられて、そのI「Wの説話キャッチ行為を示すもの。説話の文章構造のいちはん外側に置かれる。」として、そのbに「指示の助詞「と」を用いる。一つの言語作品を一括してうけるもので、「とか」「とぞ」などの類がある。」と記しておられる。即ち、末尾の「とか」「とぞ」「となむ」などが、それ以前の説話内容を語る存在とは別の存在の行為を示すしと見ておられる。

なお、その「W」とは、「説話の最終的記録者」(同六二頁)で、景戒とか源為憲とかをさす。

因みに、氏のいわれる「W」は拙論に言う「筆者」とは意

味がちがう。氏は「W」が「W自身嘗て事実タッチしたという形で語る、すなわち話し手Sとして臨む場合もある」(同六三頁)といわれる。とすると、現実の存在であるWが或る時、全知視点に立つことになる。それをさげるために拙論では「語り手」と「筆者」を区別した。岡村氏は、説話の伝承という面から、Wを「伝承事実の記録者」(同七〇頁)として位置づけられるから、拙論とはとらえ方がことなる。

⑥ 註②の書参照

⑦ なおまた「大鏡」でも、ある場合、伝聞の形式をとることがある。「その御願にてとぞうけ給はりし」(巻六、昔物語、八幡祭の条)のごとくである。即ちこの話の部分に限っていえば、「大鏡」でも目睹者と語り手(翁)とは別個にあることになる。

⑧ ここにいう「伝え手」は、いわゆる「伝承者」とは別物である。作品内部に設定せられた存在である。

⑨ これは脱文・欠文によるものと考えるか、つけ忘れた(古典大系本「今昔物語集」(一四一〇頁)と考えるか、いずれにせよ、基本文型からは除外してよいであろう。尚またその他にも若干の変形(「カクナム語り伝へタルトヤ」「トゾ語り伝へタルトヤ」など)があるが、当面の問題には関与らない。

⑩ 「これ語りける人」という言い方は、第三人称であって、したがって「これ語りける人はをがみたてまつりける」というのは、「これ語りける人」自身の発言ではあり得ない。それとはことなった人物が想定せられねばならない。

⑪ 説話冒頭の「キ」については古典文学大系「今昔物語集」

(四五六頁など参照。また「宇治拾遺物語」巻一〇の一〇話にもこれの説明に好個の例がある。冒頭の人物紹介の後、入道が話(体験談)を第一人称でして行く、そこが「我は若かりしをり、まことにたのしくてありし身也。……」のようになっている。

⑫ この他にも、この説話前半部にある「おそろしく覚えければ」のような所も、袴垂が直接自分の感情をのべているものと見ることが出来る。さらにまた、文中、保昌の方は、その心理には立ち入っておらず、ただ外面から知られる言動のみ描写してあるのに、袴垂の方はその心理をものべてある点も、この考え方を支える点である。

⑬ 長文なので挙例は略するが、巻一〇の一〇などではこの構造が更に明らかに知られる。

⑭ 註②書参照

⑮ 同右

⑯ 玉上琢弥博士は「源氏物語」に、光源氏らを実際に見聞して知っている古女房、その古女房の話を筆記し編集した女房、それをみなで読みあげる女房、という三人の作者があるといわれる(「源氏物語研究」) そう見るなら、「源氏物語」

との対比に限ればこの場合、むしろ先掲の第一例(巻五の一三の如き)の方がそれに近いことになるが、その他の一般の作り物語で考えれば、いまの例(八の二)が近いと考えられる。

⑰ この説話についていえば、その形式は、同話を収める「古本説話集」でも同じである。

⑱ 岷江入楚が指摘した「草子地」について、小西甚一博士は「全知視点の語り手が、作中場面から離脱し、語り場面に移動して、自身の考えを、一人称的に表明する部分」と説明しておられる(註②の書参照)

⑲ 岡村和江氏(前掲論文六三―六五頁)はここで「伝え手」と称するもの(氏は「話し手」とせられる)が、一つの説話の中で重層になっているものがあることを「今昔物語集」巻九の三一を例にして指摘しておられる。

なおまた、この「伝え手」に当たる位置に「書物」がおかれる場合もある。

⑳ この「宇治拾遺物語」の場合と同じようなあり方のものとして、他にたとえば「古本説話集」や「十訓抄」のごときもそうである。

(本学助教授 国語学)